Ⅰ　次の文を読んで、各問いに答えなさい。本文から抜き出す際にはふりがな（ルビ）はつけなくてよい。また、字数に制限がある場合は、句読点や「　」なども一字と数えること。また問題の作成上一部に省略がある。

からからから。

坂道を下りてくる自転車の音がします。

しんちゃんの自転車です。

（ア）からからからから。さびたチェーンを油の足りないペダルがまわす音。

なにしろ、いまから三十年も前のことですから、自転車はみな重くて

（イ）ごつごつしていて、子どもたちが使うものは、たいてい誰かのお古で、きっとどこかがこわれているのです。

私はふとんの中で耳をすまして、その風ぐるまみたいな音を聞いていました。しんちゃんが①涙目になりながら、歯をくいしばっている様子が目に浮かぶようです。

当時、私の住んでいた家の脇道は、長い長い急坂で、自転車に乗りはじめた子どもたちからは「ちびり坂」という名で恐れられていました。五年生にもちびった子がいるという噂まであるのに、しんちゃんは意地っぱりだから、三年生なのに、いつもブレーキをかけずに下りてくるのです。

（ウ）きぃぃぃぃ〜っ。

坂の下でブレーキの音がします。私はふとんの端を（エ）ぎゅっとつかみました。それまでは、（オ）てっきり空耳だと思っていたから。だって、ついさっき、柱時計が十一回鳴ったのを確かに聞いたのです。午後 A 時すぎ。八歳だった私には、とんでもない真夜中です。

②まさか、しんちゃんのはずがない。

でも、そのまさかでした。

こつん。

窓を叩く小さな音が、真夜中の（カ）しんしんとした静けさの中にこだましました。

いつもの合図です。

私はふとんの中で両方の耳を引っぱりました。寝ぼけているのではないかと思って。あ、痛い。夢ではありません。

そっとふとんを抜けだして、窓辺に近寄りました。しんちゃんが玄関から私を誘いに来たためしは一度もありません。③母がいい顔をしないことがわかっていたからです。私を遊びに誘う時は、いつもこうして二階の隅っこの、私の部屋の窓に木の実をぶつけて、（キ）こっそり呼ぶのです。

春の終わりには、きいちご。

夏の間は、青いちじく。

いまのは、たぶん、B 。

窓を開けたら、やっぱり。

月に照らされた裏庭で、しんちゃんの坊主頭が光っています。私の目は、きっとまんまるになっていたでしょう。もう一度、耳を引っぱってみました。痛いです。

しんちゃんは前歯の欠けた口を八つ切りすいかのように開けて、（ク）にかっと笑いました。「④おはよう」

念のためにもう一度いいますが、いまは真夜中です。おはようと言われても困ります。

私は唇に指をあてて首を振りました。家の中はもう寝静まっていましたが、隣の部屋で寝ている母は神経質なたちで、物音や光にとても敏感な人なのです。私が口にする食べ物や、私の学校の成績や、私がつきあう子どもたちの素性にも。

しんちゃんは両手をほほにあてて、唇を「あ・そ・ぼ」というかたちに動かしました。私が「え？」というふうにまた目を見開くと、今度は「おりてこいよ」と唇のかたちだけで言い、手招きをします。その様子があんまり普通だったから、思わずこくりとうなずいてしまいました。

急いで着がえて、窓ぎわまで伸びている柿の木の枝にしがみつきました。おさるのように両手両足で枝にぶらさがって、腰を伸びちぢみさせると少しずつ前に進みます。幹までたどりついたら、あとは枝をつたって下りるだけ。しんちゃんに教えてもらったワザです。母さんが目を覚ましませんように。私のこんな姿を見たら、きっと（注1）卒倒してしまうに違いありません。

「パン・ツー・まる・見え」

しんちゃんが手を叩き、指を［C］本つき立ててから［D］をつくり、そして遠くを見るようにおでこに手をあてました。

しんちゃんお得意の、古めかしいギャグです。パンツなんか見てやしないくせに。小学三年生のしんちゃんの目を釘づけにしているのは、私のスカートの中なんかではなく、赤くなりはじめた柿の実のほうに決まっています。

「どうしたの、いったい」

柿の木の下で声をひそめて聞きました。私につられて、しんちゃんもひそひそ声を出しましたが、まるで答えになっていません。

「今日はどこ行く？」

「いまから？」

「うん」

「うんって、もう真夜中だよ」

「そうだ、おたま池のほこらにしよう」

どんぐりみたいな目をくりくりさせて言います。そうです。いつだって、人の言うことなんかまるで聞かない子なのです。

月の光の中で、しんちゃんの自転車がさん然と輝いています。がっしりとした荷台のある黒くて大きな自転車。廃品回収の仕事をしていて、いつもリヤカーを引いているお父さんのおさがりだと聞きました。サイズは二十六インチ。低学年の子どもたちなら誰もが憧れる大人のあかしです。

「さ、乗れよ」

しんちゃんが指をくいっと動かします。テレビのヒーロー物の、主役の人の口調としぐさをまねしたらしいのですが、片方の鼻の穴からハナをたらしてそんなことを言ってもだめです。私がちり紙を渡すと、ぷうっとハナをかんで、もう一度言いました。

「乗れよ。レッツ・ゴーゴー」

すぐには返事ができませんでした。先週の木曜日のことがあったからです。でも、しんちゃんがおたま池に行きたがっているのは、先週のことがあったからに違いないのです。とにかく意地っぱりだから。嫌とは言えません。

「しっかりつかまってろよ」

「うん、わかった」

二十六インチに乗れるとはいっても、サドルに全部お尻をつけてしまうと、しんちゃんの足はペダルに届かなくて、立ちこぎ。自転車は少しの間、私の重さにふらふらします。からからとチェーンが回転するうちに、ようやくスピードをま

して、すべるように夜道へ走り出しました。

さすがにちびり坂は登れないと思ったのでしょう。遠まわりをして、郵便ポスト通りと呼ばれる農道の方角へ向かいます。

月の明るい晩でした。なにしろ三十年も前で、しかも田舎のことですから、外灯などなく、電信柱の上に裸電球が光っているだけの道だったけれど、自転車のライトが消えかかっているのも気にならないほど。灯がないぶん、あの頃の月はいまより明るかったのです。私と自転車の影が、田んぼ道に黒々と映っていたのを覚えています。

二人でこっそり遊びに行く時には、いつもしんちゃんの自転車の後ろに乗りました。私が小学三年生になっても、自転車に乗れなかったからです。乗れるようになったのは、みんなしんちゃんのおかげです。

この日がいつだったのか、正確な日づけはいまでも思い出せません。風は少し冷たかったけれど、秋の早いあの地方のことだから、たぶんまだ九月の末だったと思います。あの地方、なんて私がよそよそしい言い方をするのは、そこで暮らしていたのが、その年の春から秋にかけての半年間だけだったからです。

母の生まれ故郷でした。やっかいな（注2）小児ぜんそくだった私のために、一時的に転居したのです。二十歳まで生きられるかどうか、お医者さんにそう言われるほどだったとか。あの頃の私は、毎晩目を閉じる時に、次の朝も目覚めることができるのかどうかさえ不安で、びくびくしながら暮らしていました。それからもう三十年、いまの私は自転車をすいすい。とんだ（注3）藪医者ですね。

（中略）

小さな郵便局と赤いポストを過ぎると、あたりはさらに寂しくなってきました。雑木林を騒がす風の音が、たくさんの人の囁き声に聞こえます。

ざわざわざわ。

月の光に白く照らされたすすきの穂は、たくさんの腕が手招きをしているよう。

ゆらゆらゆら。

私の胸もざわざわ、ゆらゆら。しんちゃんの自転車の後ろで小さく体をまるめていました。荷台をぎゅっとつかみながら、やっぱり来るんじゃなかったと後悔しました。なにしろ鎮守の森のおたま池は、ここに住む子どもたちにとって、それは恐ろしい場所なのです。

人がいなくなって荒れ果てた神社の中にある、ひっそりとした池です。池のまん中に（注4）中洲があり、そこにぼろぼろに古びた（注5）ほこらが建っています。

ほこらの中には五年前に行方不明になった神主さんがいる。子どもたちはそう噂していました。どういうふうに「いる」のかは謎です。ある子はミイラになっていると言い、別の子はすっかり骸骨になっていると大人から聞いたと言い、雨水を飲み、ムカデを食べてまだ生きていて、誰かがのぞくと「見るな」と大声をあげる、なんていう恐ろしい話もありました。本当のところは誰も知りません。誰ものぞいたことがないのですから。昼間でも怖いおたま池のことを考えただけで、体がぶるりと震えます。しかもそこへたどりつく前には、もうひとつ、

⑤恐ろしい関門が―。

ざわざわざわ。

ゆらゆらゆら。

私の不安をよそに、自転車は夜の中をぐんぐん進みます。自転車に乗れない私は、いまさら一人で帰るわけにもいかない。

（中略）

からからからから。

しばらく進むと左手に桑畑が見えてきます。その先には、子どもたちの夜歩きをはばむ恐ろしい関門。このあたりの墓地です。

桑の葉の間からにょきにょきと顔を出している（注６）卒塔婆や石灯籠が、人の頭に見えました。その頭がみんなこっちを向き、私たちを睨んでいるように思えました。目を閉じてしまいたいのですが、目をつむると、開けた時に目の前に何かが現れそうで、もっと怖い。

「なんだかこわい。誰かがいるみたいだね」

私は口に出して言ってみました。言葉にすれば、少し恐ろしさが薄れる気がして。だけど、しんちゃんのひと言で、⑥その努力も水のあわ。

「うん、いるんだ」

「……誰が？」

「坂田のおばあ。さっき来る時に見た。おそなえまんじゅうでお手玉してた」

坂田さんちのお婆さんはすっかりぼけてしまっていて、毎晩ふらふら出歩くから困っている、と坂田のお嫁さんが母の実家のお嫁さんにこぼしているのを聞いたことがあります。でも、坂田のおばあがいるはずがない。だって―。

「ね、坂田さんとこのおばあさんって、先月―」

「ああ、自分が死んだことも忘れちまってるんだよ」

当時、その土地ではまだ土葬でした。死んだ人は丸いオケのような柩に入れて、そのまま葬るのです。死者が迷い出ないよう、盛り土の上に大きな石を置くという土地柄でしたから、なにがあっても不思議はないのです。

「ほんとに？」

「（注７）ほんまちよこ」

しんちゃんのギャグはいつも古くて笑えません。いまはとくに笑えない。闇のむこうから、坂田のおばあが歌う数え唄が聞こえてくる気がして、私は自分のこぶしだけを見つめ、指のつけ根にでこぼこができるまで荷台を握りしめました。

墓地を過ぎると、いよいよ鎮守の森。熊笹の中をいつまでもだらだら坂が続きます。しんちゃんは海老のようにそり返って自転車をこいでいます。

「だいじょうぶ？　私、降りようか」

「うぎぎ」

「後ろで押そうか」

「うぎぎぎ」

しんちゃんは意地になって返事をしません。

「手がもげちゃうよ」

本当にもげそうなんですもの。

坂道をようやく登り切ると、しんちゃんは自転車を停め、道ばたにお尻から座りこみました。酸素不足の金魚みたいに目をふくらませ、息をはずませて、唇をつき出しました。

「お前、重い」

いまの私だったら、そんなことを言われたら、蹴とばしてやるところですが、八歳の私は嬉しくて、荷台に乗ったまま声をはずませました。

「体重、一キロふえたんだよ」なにしろダイエットなんて言葉もなかった頃のことです。病弱でやせっぽちの私は、学年の標準体重をこえるのが夢でした。「ずっと寝てたからかな」

ずっと寝ていたのは、先週の木曜日のことがあったからです。

先週の木曜日、こっそりおたま池に行った私たちは、池に落ちて溺れてしまっ

たのです。私は病院に運ばれて、何時間も意識不明のままでした。退院してからも大事をとって、学校を休み続けていたのです。

「お前、もう後ろに乗るな。自分でこげよ」

しんちゃんの自転車で何度か練習したことはあったのですが、まったくだめでした。二十六インチなどいきなり乗れるはずがありません。

「俺、いつまでも乗っけてやれないぞ」

「うん、わかってる」

わかっていました。

「荷台っていうのは、荷物を置くとこで、人を乗せるとこじゃないんだ。父ちゃんがそう言ってた。俺なんか、小学校に上がる前から二十六インチに乗ってたんだぞ」

「練習するよ」

「ホジョリンなしでだぞ」

「わかった」

「だめだな」

「え、何がだめ」

「返事がだめ。迫力足んない。そういう時は、わかったじゃなくて、こう言うんだ」しんちゃんが重大な秘密を打ち明ける顔で言いました。

「がってんしょうたくん」

「なにそれ」

「いいから、言ってみ」

「がってんしょうたくん」

「なんか違うな」

「がってんしょうたくん」

五回目くらいでようやくしんちゃんは、うん、まあいいか、とうなずきました。

「俺が教えたなんて誰にも言うなよ。また先生におこられちゃうから。約束だぞ」

「がってんしょうたくん」

私は答え、きっぱりと口をむすびました。クラスの誰かが変な言葉を使うと、先生はしんちゃんを叱るのです。どうせお前が教えたんだろ、と。かわいそうな、しんちゃん。半分は先生の言うとおりなのですが。

（中略）

池のほとりまで戻って、二人で大きく息をはき、そして、もう一度言いました。

「なぁんだ」

「なぁんだ」

さっきまで震えていたことなんて、お互いに忘れた顔をして。そして本当に、いつのまにかここが恐ろしい場所であることを忘れていました。しばらく二人で池のほとりでどんぐりを拾ったり、並んで座って裸足になってぱしゃぱしゃと池の水をかきまわしたりしました。

小石を投げて、水面にいくつ波紋をつくれるかに熱中していたしんちゃんが、波紋が消えるのを見つめながら言います。

「このあいだは、ごめんな」

「え？」驚きました。しんちゃんが誰かにあやまるなんて。

「お前のこと、おぼれさせちゃってさ。俺、泳げないから、つい足にしがみついちゃって」

「気にしてないよ、ぜんぜん」

「どうだった、死にそうになった時って」

私は黙(だま)って首をかしげました。うまく答えられなかったのです。どんぐりを数えるのに忙(いそが)しかったし。

「苦しかった？」

「よく覚えてない。でも、夢の中でお花畑を見た。春の花も、夏の花も、秋の花も、いっぺんに咲いてるお花畑。きれいだったよ」

いつも死の影に怯(おび)えていたくせに、あんなふうに花に囲まれて眠り続けていられるものなら、あんがい死ぬのも悪くないかも、なんて八歳の私は思ったものです。

「川がなかった？」

「あ、あった。お花畑の手前に。広い川だよ。でね、橋がかかってるの。

（注8）牛若丸のお話に出てくるような橋。そこを渡れば、お花畑に行けるのがわかったから、私、そっちへ歩いて行ったんだよ」

「金色でぴかぴか光ってただろ」

「そう、金ぴかの橋……あれ、なんで知ってるの」

「俺も見たもん。花畑も見た。すげえきれえだった」

意外なことを言います。ふだんのしんちゃんにとって、おしろい花は

（注9）落下傘(さん)遊びの道具、サルビアの花は蜜(みつ)を吸うおやつです。

「不思議。同じ夢を見てたんだね」

「おどろきももの木さんしょの木」

「ブリキにタヌキに蓄音機(ちく)」

しんちゃんがまた石を投げる。⑦今度はひとつしか波紋をつくれませんでした。

「俺、川のこっちにいたんだ。向こうがわにお前が見えたんだよ。でも橋の手前で帰っただろ」

「うん、なんだか急にこわくなって、引き返しはじめたら、目がさめたの」

「やっぱりなぁ」しんちゃんが言います。「あの時、俺、お前のこと呼ぼうとしたんだよ。でも、やめた」

なんと答えていいのか迷ってから、最初に思いついた言葉を口にしました。

「ありがと」

しんちゃんが死んだという知らせを聞いたのは、先週の土曜日。退院して、家に帰ってからです。私と同じ病院に運ばれた時、しんちゃんはもう息をしていなかったそうです。

「呼べばよかったな」

「⑧もう遅いよ」

「なぁ、俺、臭(くさ)い？」

「なんで」

「……別に」

「だって、お前、さっきから、こんな顔してるもん」しんちゃんが給食のピーマンを我慢(がまん)して食べている時の顔をします。「鼻の穴が細くなってる」

「むりすんなよ。臭いんだろ」

「ちょっとだけ。でも気になんないよ。だって、しんちゃん、いっつも臭かったもん」

なぐさめるつもりだったのに、しんちゃんはかえって傷ついた顔をして、泥(どろ)だらけの白い着物のすその匂(にお)いをかいでいます。初めて気づいたように、頭に巻いた三角の布を手にとって、しばらく眺(なが)めてから、それで、ぷうとハナをかみました。（中略）

ずりずり。しんちゃんがお尻を動かして私から体を遠ざけました。

ずりずり。⑨私がむきになって近づくと、またお尻をずらす。
ずりずり。
ずりずり。
「ねぇ、どうやって出てきたの」
そう聞くと、しんちゃんはようやくお尻を動かすのをやめて、空を見上げました。むずかしいことを考える時のいつものくせです。
「わかんないんだ、それが。自分でも。生命の神秘だな」
理科の時間に習ったばかりの言葉を使って、鼻の穴をふくらませます。
「でも、生命もうないよ」
「あ、そうか」
「お墓の中って暗いの？」
「うん、暗い。真っ暗い中で、ずっと考えてたんだ。おたま池のほこら、おたま池のほこらって。そしたら、いつのまにか外に出てた。きっとどこかに穴が開いてたんだな。おととい、地震があったろ」
「うん」
「あれのせいかもしんない」
「すごいや」
「じゃあ、もし大きな地震があったら」
⑩あちこちに穴の開いた墓地を想像しかけたのですが、怖(こわ)くなってやめました。本当のことを言うと、ずっと怖かったのです。さっき、しんちゃんが来た時も、息がとまるかと思ったくらい。しんちゃんだから、平気なふりができたのです。突然やってきたのが、坂田のおばあだったら、とっくに気絶しています。
だけど、もう怖くありません。まっすぐ顔を見ることもできます。しんちゃんは前とちっとも変わっていないから。顔の色は冬の畑の土みたいで、左の耳が何かにかじられたように欠けてしまっているけれど、しんちゃんはしんちゃんです。
（中略）
「お腹はすかないの」
「ぜんぜんすかない」食いしん坊のしんちゃんは、初めて寂しそうな顔をしました。
「明日、俺のおそなえまんじゅう持ってきてやるよ」
「いらない」
「遠慮(えんりょ)すんなって」
「ねぇ、一人でさびしくない」
私が聞くと、しんちゃんがまた夜空を見上げます。今度は慎重(しんちょう)に、ゆっくり首を動かして。
「お、満月だ」
「おだんごみたいだね」
しばらく二人で月を眺めていました。まんまるいきれいな月でした。それっきり答えを聞くのを忘れてしまいました。しんちゃんも何も答えませんでした。
⑪きっと、答えるのが嫌だったのか、答えるのを忘れてしまったか、どちらかです。
「なぁ、明日はどこ行く」
帰り道です。息をはずませて自転車をこぎながら、しんちゃんが言います。私はじっとしんちゃんの着物のえりから這(は)い出てきた蛆虫(うじむし)を見ていました。いつもなら悲鳴をあげてしまうところですが、蛆虫がしんちゃんのうなじを上り、耳の穴に入りこもうとするまで眺め続けていました。蛆虫を手でつまんで捨てたのは、

あとにも先にも、この時だけです。
なるべく明るい声で私は言いました。
「コスモスのお花畑を見に行こうよ」
そんなのつまんない、と文句を言うに決まってる。そう思っていたのですが、
「あ、いいね。コスモス」
しんちゃん、お墓の中で、少し性格が変わったみたい。
帰りは近道をしました。ちびり坂をいっきに駆けおります。
「ひゃっほ〜」しんちゃんが叫びます。
「ふわぁ〜」私も。
三十年たったいまでも思います。あれ以上素敵なジェットコースターに乗ったことはないって。ぜったい自転車に乗れるようになろう、怖いのか楽しいのか自分でもわからない悲鳴をあげながら、私はそう決めました。
「自転車、ちゃんと練習しろよ」
「がってんしょうたくん」
坂の下の曲がり角で、しんちゃんがちぎれるほど手を振っています。月が雲に隠れて、あれほど明るかった夜にカーテンが引かれてしまいました。しんちゃんの姿はもう影法師です。
私もいっしょうけんめい手を振り返しました。しんちゃんの右手が心配です。だって本当にちぎれそうだったから。
「もうやめなよ」と言いかけたとき、しんちゃんはくるりと背中を見せて自転車に乗り、ふいっと曲がり角の向こうに消えました。
追いかけて、後ろ姿を見送ろうかと思ったけれど、やめました。いくらしんちゃんでも、ちびり坂を最後まで自転車で登れるはずがありません。意地っぱりなしんちゃんは、自転車を歩いて押して登るところを、私にはぜったい見られたくないはずだから。
⑫でも追いかければよかった。
あとになって、何度もそう思いました。（中略）
いまではあの地方も、みな火葬になったそうです。お墓も自動車部品工場になってしまったとか。高校を卒業してからの私は、一人で暮らしはじめましたから、風の便りに聞くばかりですが。
そういうわけで、私は自転車に乗れるようになりました。いまでは二人の子どもを前と後ろに乗せ、ハンドルの両側にスーパーの買い物袋をさげて走る。そんな芸当も朝飯前。しんちゃんのおかげです。あれから誰かの自転車の後ろに乗ったことは、一度もありません。
オートバイだけは別。夫はわが家の三匹の猫よりオートバイのほうが可愛いという人で、ときどき言いわけがわりに私を（注１０）タンデムに誘うのです。
もういい年なんだからやめたら、と呆れ顔をしても、バイクでコーナーを攻めていると、生と死のはざまを垣間見るような気がする、なんて偉そうなことを言って。なんにも知らないくせに。
「しっかりつかまってろよ」夫が言います。
答える私。
「E」
「なんだそりゃ」
「なんでもない」
それは言えません。約束だから。

（荻原浩「しんちゃんの自転車」より）

注１　卒倒する…突然意識を失って倒れること。

注２　小児ぜんそく…子どものぜんそく。咳などで呼吸困難になる症状。

注３　藪医者…診断・治療の下手な医者のこと。

注４　中州…川の中で、土砂が積もって低い島になっているところ。

注５　ほこら…神仏をまつった小さな建物。

注６　卒塔婆…死者の供養を目的に、墓の背後に立てる薄い板状のもの。

注７　ほんまちよこ…昔の有名な歌手・女優。本間千代子。

注８　牛若丸…源義経の幼名。武蔵坊弁慶と京都の五条大橋での出会いの話が有名。

注９　落下傘…上空から地上に降りる際に身につける傘状の用具。パラシュート。

注１０　タンデム…ここはオートバイに二人乗りすること。本来の意味は縦に二頭つなげた馬車のこと。

問１　波線部（ア）～（ク）の語句で、二重傍線部「こくり」（２ページ目にある）と同じ種類のことばを全部抜き出し、記号で答えなさい。

問２　傍線部①「涙目になりながら、歯をくいしばっている」とありますが、なぜしんちゃんはこうなっているのですか、本文の内容を踏まえて答えなさい。

問３　傍線部②「まさか、しんちゃんのはずがない」とありますが、「私」がそう思う理由を二十字以内で答えなさい。

問４　傍線部③「母がいい顔をしないことがわかっていたからです」とありますが、本文から読み取れる理由としてふさわしくないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　しんちゃんはいつもふざけている子なので、一緒に遊ばせたくないと思ったから。

イ　しんちゃんが「私」をろくでもない遊びに誘うと思ったから。

ウ　「私」は体が弱いので、外で遊ばせたくないと思ったから。

エ　「私」がしんちゃんを好きになると困ると思ったから。

問５　傍線部④「おはよう」と、真夜中なのにしんちゃんが言った理由として、本文から読み取れることで最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア　しんちゃんは、「おはよう」以外のあいさつを知らないから。

イ　しんちゃんは、さっき起き出してきたばかりだから。

ウ　しんちゃんは、いつも「私」にうそばかりつくから。

エ　しんちゃんの「おはよう」は「遊ぼう」の意味だから。

問６　傍線部⑤「恐ろしい関門」のような表現法を何と言いますか、次から選び、記号で答えなさい。

ア　直喩法　　イ　隠喩法　　ウ　擬人法　　エ　倒置法

問７　傍線部⑥「その努力」とありますが、何を目的とした努力ですか、答え

なさい。

問8　傍線部⑦「今度はひとつしか波紋をつくれませんでした。」とあるのはどういうことを表していると考えられますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　しんちゃんがこの世の人でなく、生きているのは「私」しかこの場にいないことを暗に示している。

イ　しんちゃんは、自分が死んでいたことを初めて知り、急に元気がなくなった様子を暗に示している。

ウ　しんちゃんは「私」がまだ生きていることを初めて知り、急に元気がなくなった様子を暗に示している。

エ　しんちゃんが、この世にとどまっていられる時間がもうわずかであることを暗に示している。

問9　傍線部⑧「もう遅いよ」のように言ったのは、どういうことを思ったからですか、これより前の所から一文で抜き出し、最初の六字を答えなさい。

問10.　傍線部⑨「私がむきになって近づくと、またお尻をずらす」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　しんちゃんは、「私」のことが好きなので、恥ずかしくなったから。

イ　しんちゃんは、自分が死んでいるので「私」に対して遠慮（りょ）する気持ちがあったから。

ウ　しんちゃんは、自分が臭いと言われたことを気にしたから。

エ　しんちゃんは、女の子と二人きりで仲良くすることになれていないから。

問11.　傍線部⑩「あちこちに穴の開いた墓地を想像しかけたのですが、怖くなってやめました。」とありますが、どういうことを想像しかけたのですか。「墓地の穴から」という書き出しで答えなさい。

問12.　傍線部⑪「きっと、答えるのが嫌だったのか」とありますが、しんちゃんが答えるのが嫌だと思っているなら、どういうことが理由だと思われますか。考えて答えなさい。

問13.　傍線部⑫「でも追いかければよかった」と「私」が思った理由を、あなたが「私」だと仮定して答えなさい。

問14.　文中の空欄（らん）［A］、［C］に入る数字を漢数字でそれぞれ答えなさい。

問15.　文中の空欄［B］に入る語句としてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。またなぜそれを選んだのか、その理由も簡単に答えなさい。

ア　石ころ　イ　ビー玉　ウ　どんぐり　エ　ボタン

問16.　文中の空欄［D］に入る語句を次から選び、記号で答えなさい。

ア　丸　イ　バツ（✖）　ウ　笑顔　エ　変顔

問17.　文中の空欄［E］には、文中でくり返してできたある語句が入ります。

その語句を抜き出して答えなさい。

Ⅱ　次の傍線を引いたカタカナを漢字に直しなさい。

1　会社のカブシキを公開する。
2　ピアノのドクソウ。
3　ギュウニュウを飲む。
4　セイケツなハンカチ
5　マンション建設反対のショメイを集める。

Ⅲ　次の傍線を引いた漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

1　雪が降る兆候だ。
2　今朝の天気は晴れている。
3　絵画の展覧会。
4　あの地区は大きな票田だ。
5　税金を納める。

Ⅳ　次の慣用句・ことわざの意味を後から選び、記号で答えなさい。

1　目から鼻へぬける
2　色を失う
3　折り紙をつける
4　山をかける
5　梨（なし）のつぶて

ア　成功を願って見込みをたてる
イ　最後の最後で失敗する
ウ　とても素早い様子
エ　だいじょうぶだと請（う）け負う
オ　何の反応もないこと
カ　むやみにがんばること
キ　驚いて顔が青くなる
ク　目立つように仕向ける
ケ　好物がたくさんあること
コ　とても頭がよいこと

以上